慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	手紙にみるカフカの『変身』
Sub Title	Kafkas "Verwandlung" in psychobiographischer Sicht
Author	黒岩, 純一(Kuroiwa, Junich)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.67, (1995. 3) ,p.367(20)- 386(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	七字慶紀, 若林眞両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00670001-0386

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

手紙に見るカフカの『変身』

黒　岩　純　一

一　フェリーツェ宛の手紙

作品の成立に関して，作者自身が行っている執筆の動機や背景についての発言は，それが正確な情報源としての機能を果しているかどうかを慎重に吟味，検討する必要のあることは言うまでもないが，作品解釈にあたっているものには不可欠の資料となる。

『変身』は1912年11月17日から12月７日までの約20日の間に成立しているが[1]，カフカの日記は同年９月25日で中断しており，再開は翌1913年２月である。つまり日記が中断している期間に執筆されたことになる。この中断は偶然というよりもむしろ初期の執筆期と『判決』や『変身』を成立させた成熟期との間に生れたカフカの内面的な危機によるものと考えるべきであろう。このこと自体，『変身』成立時の心理伝記的状況を判断するための重要なヒントとなる。

エリアス・カネッティはカフカの書簡，とりわけ『フェリーツェへの手紙』が単なる私信にとどまらず，作品全体にとって重要な機能を果していることを指摘した最初の研究者であった[2]。カネッティはいわゆる私的テクスト（日記・手紙）が文学作品の重要な構成要素となっている点を明らかにした。ヴォルフ・キットラーにいたっては，「カフカの書きものは文通から生れている」とまで極言する[3]。カネッティはすでに，日記が中断しているところではフェリーツェ宛の手紙が「拡張された日記」となっていること[4]，そしてこの中断は1912／13年の冬におけるフェリーツェとの危機的局面と一致する点を指摘している。

1912年8月中旬，友人マックス・ブロートの家でフェリーツェ・バウアーを紹介されたカフカは9月20日から殆ど毎日，彼女に宛てて手紙を書く。敬称のSieが親称のDuに移行したその同日の手紙（11月11日）のなかで彼はすでに注意深く，「私はまだかろうじてひとり生きるだけの健康を保っていますが，もう結婚できる状態にはありません，ましてや父親になることなど望むべくもありません」とはっきり伝えている（F. 88）カフカはその数日前，つまり11月7日，次のように書いている：「大きな距離（Entfernung）をおいてやさしく私を許して下さい」（F. 80）彼にとって大切な距離が縮まることをすでに恐れているのである。カフカはフェリーツェを切に必要としながら，彼の生活（昼間の事務所での仕事と夜間に充てられた独身者の文学上の仕事）のバランスが崩されることを極端に恐れていた。「我われが一緒にいたら，私は沈黙しているでしょう。我われが離れて（entfernt）いるから，私は手紙を書かないではいられないのです」（F. 81）これは背信行為と批判されても仕方のない言葉であり，恋人にたいする尋常な態度では決してない。だが「離れていること」を意味するEntfernungあるいはentfernt が『フェリーツェへの手紙』のキーワードとなっていることも事実である。そしてこれらの単語は『変身』の解釈にあたっても重要な意味をもつ。手紙にみる彼らの状況は逆説的である。一方でこの文通はカフカの執筆を助けたばかりか，これまでもすでに『判決』を生み出しており，カフカ自身によって文学的突破とも考えられていた。（カフカは『判決』をフェリーツェに捧げている）（F. 53）

『変身』が書かれたほぼ20日間にカフカは40通を超える手紙をフェリーツェに書き送っているが，この時期はほかに『失踪者』の草稿が1日8乃至10頁の割合で書かれており[5]，フェリーツェとの文通はカフカの文学創造の推進力となっていたのである。

他方，平均1日2通という数多い文通は当然のことながら，手紙での交流を人間的な結びつきに変質させてゆく。29才の独身者カフカはこの問題にたいする態度表明をせまられる。彼は不安になり，幸福になる能力が自分には欠けていることを強調し，せいぜい幸せの予感が持てる程度である

と書く。(F102) 実際には投函されることなく終った草稿には次のような文もみられる。「最愛のお嬢さん！貴方はもう私に手紙を書いてはいけません。私もこのさき，貴方に書くことはないでしょう……はやく私という幽霊をお忘れ下さい。そして以前のように，陽気で落着いた生活をなさって下さい」(F. 83f.) フェリーツェを必要としながら，これ以上彼女を自分のもとに引きとめてはおけないという彼の動揺がみられる。そして11月17日付の手紙の最後の個所に，『変身』に関する最初の言及がみられる。「今日にもある小さな物語[6]を書くつもりですが，その物語はベッドで悩んでいるときに頭に浮び，私を心の底から苦しめているのです」(F102)

しかし今回は『判決』のときのように一気に書き上げることができない。執筆を開始した17日／18日の夜の手紙ですでに，翌日の事務所の仕事を考慮して，書くことを中断すると告げている。更に数日後には，「このような物語はせいぜい1度の中断で10時間づつ2回にわたって書き下ろさなくてはならない」と述べている。(F125)「書くこと」はカフカにとって「極めて官能的なよろこびを伴った仕事」であり (F117)，恋人にも替わり得るものであった。しかし筆はすすまない。翌日の事務所の仕事を考慮してこの「小さな物語」を机の横に片づける日が続く。(F116；117) 公務に関連して裁判所の法廷に出るなど忙しい日が続いたからでもある。「いままた片づけるこの書きもの (『変身』のこと) はなんと嘔吐を催させるような物語でしょう」(F117) しかし不満足なかたちではあったが少しずつ完成に近づく。12月1日になると，小さな物語との戦いも最後の章に入ったことを報告している。(F145) そして12月5日／6日の夜の手紙：「私の小さな物語の主人公がすこし前に死にました。あなたの慰めになるなら，彼は十分平穏に，そしてすべての人びとと和解して死んだことを知って下さい……物語のさまざまな個所にはっきりとぼくの疲労した状態やその他の中断，それとは関係のない心配事が書き込まれているのは残念です」(F160)

カフカが創作の進展状況をこのように詳細に報告している背景には，フェリーツェと自分の間に距離の必要なこと，つまり自分の意識を中断させることなくこの物語に集中させておくためには「距離」が不可欠であるこ

とを彼女に納得させる必要があったからだと思われる。H・ビンダーは『変身』においてカフカの創作プロセスを再構成する試みを行っているが[7]，フェリーツェ・バウアーとの関係と並んで，もうひとつ心理的前提，即ち彼の家族状況を挙げている。文通が始まって間もない時期に，末の妹オットラが彼の「最も親しいプラハの女友達」であること，ただ「父と私とは互いに強い恨みの気持を抱いている」と報告している。(F. 87) 敵意にも近いこの恨みの感情は40頁を超える長文の『父への手紙』に詳しいが――それにはさまざまな理由があるが――その恨みの気持がこのころ，アスベスト工場の共同経営をめぐる対立によって，強まっていたことが明らかである。そして更にまたひとつの事件が加わる。カフカの母がひそかにフェリーツェからの手紙を読み，その生活感情に共感した母が実生活上の影響力を息子に与えてくれるよう手紙で彼女に依頼したのである。フェリーツェはカフカと共通の友人であるマックス・ブロートに相談した。ブロートの態度からこの事実を悟ったカフカの目にはこれが家族の裏切りと映ったのである。ビンダーの見解に従えば，この家族による裏切りはもう一度繰り返される。即ち妹オットラが10月初旬，アスベスト工場の経営に関して父の側につき，兄の非協力を批判したのである。(B. 107ff.) 恋人フェリーツェや家族との問題に加えて，アスベスト工場の問題に心を磨り減らしていたカフカをこの妹の裏切りは絶望へとおとし入れた。ブロートはフェリーツェにカフカの両親の無理解とカフカに自殺の虞れのあることを説明し，理解を求めている。(F115)

以上のような心理的伝記的葛藤が変身の概念に結びついていったものと考えられる。理解されない人間は除去されるべき人間である：「私は両親をいつも追跡者と感じていた」と彼はフェリーツェに告白している。(F112) しかし1912年12月末，この危機は差し当たっては回避される。「家族の協調はもともとぼくによって乱され，それも時を経るにしたがってひどくなるため，自分でもどうしてよいかわからない。両親やみんなにたいして罪深く感じている」と反省する。(F219) 1日の生活のリズムを昼過ぎまで事務所，午後は睡眠，深夜10時過ぎから「書くこと」に充てていたカフカは，

アスベスト工場をめぐる緊急時にも家族の構成員としてなんら役に立っていない。その負い目があった。たとえ，それが中産階級的な，あるいは商人的な尺度によるものではあっても，家族の期待を裏切ってしまった人間，役立たずの人間であると彼に意識させるのには充分であった。菜食主義にもとずく食習慣もすでに始まっていた。家族の中の異端児，家族の協調を邪魔する攪乱者であることにカフカは苦しんだ。

ところが実際には，カフカ家の廊下部屋に寝ている彼は音に敏感に反応し，その点では攪乱の被害者であると感じていた。(T171)[8] つまり彼は家族の生活を妨げながら，自分の生活もまた邪魔されている der gestörte Störer[9]であった。カフカは『変身』を「とりわけ嘔吐を催させるような物語」とよんでいるが (F117)，この物語は家族間の裏切りと同時に協調回復の物語でもある。フェリーツェとの文通によっていよいよはっきりしてきた生活状況，家族状況に直面すると，『変身』のなかの住居の形態が実生活における住居のそれと一致するという指摘[10]，あるいは物語の筋のデテールまでもが伝記的要素に規定されているという解釈[11]もそれほど重要な意味はもたなくなる。

カフカが自力で解決のつかない心理的，伝記的な問いに対して，『変身』を書くことでその答を発見しようとしたのであれば，その答はテクストのなかにこそ読み取られるべきである。

二　有機体としての家族

1921年秋，カフカは妹エリに宛てた手紙のなかで，家庭内における子供の教育の問題に触れ，「あらゆる人間のうちで，いちばん子供たちの教育を委ねていけないのは両親だ」というジョナサン・スウィフトの言葉を紹介し，自分の意見もやはり同じ方向にあると断った上で，更に続けて次のように書いている。「家族とは極度に複雑で，不均衡な有機体であり，構成員が同等に保たれることは絶対にあり得ない。子供の能力を無私の愛情をもって見守ることなどおよそ不得手な集団であり，家族獣と呼んでもさしつかえない。両親は途方もない強権を与えられており，彼らによって言い渡

された限度をきちんと守れるような人間だけが場所を与えられる。それを守らなければ放り出されるのではなく——なぜなら1個の有機体の問題であるから——呪われるか，食い尽されるか，あるいはその両方である」(vgl. B344f.)

それではどうしたらよいか？　スウィフトに従えば，子供たちを両親から引き離しておくことが最上の策ということになる。

こうした有機体としての家族関係がそのまま『変身』にドラマ化され，家族以外の脇役たちによって若干の補足が加えられている。

主人公のグレーゴルは他のセールスマン仲間を「ハレムの女たち」とよんで羨んでおり，明らかに彼らにルサンチマンを抱いている。仕事を離れた彼は糸鋸細工を趣味として，列車の時刻表を検討しては暇な時間を過ごしている。日頃，女性にたいする彼の関係は抑制されており，数少ない接触の機会も彼の無器用さと結婚にたいする決断力の弱さのために挫折に終っている。(E122) こうした一切は単に抑制された独身者の姿というよりも，精神的な避難所をもたないセールスマンの姿であり，確固たる性格を欠いた人間を示している。

妹のグレーテはこのドラマの第2の主要人物である。ドラマの冒頭まで，彼女は甘やかされた市民階級の娘として，美しい服を着，たっぷり睡眠をとり，相応に家事を手伝い，ささやかな楽しみに参加する。ヴァイオリンを趣味とし，ひかえ目にその役回りに合わせて，ただ将来の夫を待っているだけの娘である。

父は自分の店が破産した後，第一線を退き，老いて病をかかえているようにもみえる。ところが間もなく読者には，彼が完全に健康であることが知らされる。(E115) (事実，その事態に追いこまれたとき，彼は働くこともできたのである。)だが，差し当っては，ガウン姿でいくつもの新聞を何時間もかけて読み，ほとんど外出もしない老人である。物語の冒頭にみる父の老耄の姿は，とりわけ家父長制の伝統の濃厚なユダヤ人の家庭にあっても，それほど強い支配権を持っているとは思わせない。ウルフ・アーブラハムによれば，1900年頃，プラハの全ドイツ人の家庭の60%以上が家事使

用人を雇っており、その内，少なくとも15%は2名あるいはそれ以上の使用人を雇っていたという[12]。カフカ家は丁度このザムザ家のように2名の家事使用人をもっていた。従ってここに描かれた家庭も同化し，市民化したプラハのユダヤ人家庭と解するのが自然であろう。しかしザムザ家における父の強い支配権については物語のなかにいくつもヒントが与えられている。グレーゴルが支配人を部屋に入れようとしないとき，父はたちまちいらいらした姿をみせるし(E 81)，息子がはじめて甲虫として登場したときのステッキと新聞を振りまわす姿。(E 91f.) そしてグレーゴルがはじめて彼の部屋から這い出たときは，「父の声とも思われないひびきの声で」甲虫を追い戻したのである。(E 93)

物語のはじめにおいては極めて害意のない存在として登場した父であるが，次第にカフカの描く父親像のなかでも最も乱暴な血統の父親であることが明らかになる[13]。それは老耄の姿で寝ていたベッドからまっすぐ立ち上り，父としての支配権を奪い返し，更に息子に死刑の判決まで下した老ベンデマン（『判決』）の姿と重なり合う。

それにひきかえ，母はごく常識的に反応する典型的な19世紀後半の女性である。困難な状況にあっては夫に行動力と素早い決断を期待するが，自分はと言えば，たちまち失神するタイプである。彼女の「穏やかな声」(74)は調和をつくり出す可能性を期待させるが，失神は調和の終りをもたらすだけである。

支配人や3人の間借人たちはそのときどきにおけるグレーゴルやザムザ家の状況を特徴づけ，それぞれ権力と権力の喪失というテーマを展開する。支配人はグレーゴルの勤める会社のヒエラルヒーをザムザ家のなかにまで持ち込んでくる。彼は家族の前で，グレーゴルの身分が決して確固たるものではないことを口にするのである。(E 82) 3人の間借人たちは単に部屋を借りているだけでなく，一家の食卓や居間を占領することもあり，料理の出来具合をチェックし，家の中の秩序にもうるさい。あたかも主人の如く振舞い(E126)，音楽好きのグレーテに演奏をさせながら，平気でおしゃべりを始める無礼な連中でもある。(E130)

使用人たちは権力の喪失を別の面から展開してみせる。彼らとの関係においては，ザムザ家が雇用主であり，女中や料理人の雇用も解雇も家族の一存によって決定されるのである。

グレーゴルによってときに美化されてはいるが，このザムザ家は決して明るい憩の場とはなっていない。一家は崩壊に向っていることを感じていながら，意図的にそれを無視し，精神的に不安定な状態にありながら，なお市民的な生活の理想にしがみついている。部屋を貸すことでかろうじて生活水準を維持しているが，そのため間借人の前では卑屈な集団と化している。変身したグレーゴルの姿を目撃した間借人の一人は「忌わしい状態を顧慮して契約解消を宣言する」(E132)

しかし客観的にみたとき，忌わしい状態はいまに始まったわけではなく，最初からこの家庭を支配していたのである。怠惰から老衰を装う父，あてにならない，甘やかされた妹，意志の弱い母，そして発育不全の独身者である息子，彼は怨みをのみ下し，寄生的な家族を養うため上司の前に這いつくばっている。変身のドラマはここから始まるのである。

三　メタファーとしての甲虫像

「或る朝，グレーゴル・ザムザは不安な夢から眼を覚ますと，ベッドの中で自分の姿が一匹の途方もなく大きな毒虫に変っているのに気がついた」(傍点筆者)。これはよく知られた『変身』の冒頭の文章であるが，テクストではすでにこの個所で，「毒虫」という単語が使用されており，従来広く行われてきたメタファーの意味が文字通りに受け取られ，最後までそのイメージの論理に従っている。それは「生きるに値しない」，「有害な」人間の生存権を剝奪するような，そんな言い回しとして好んで用いられるメタファーである。傍点で示したように，グレーゴルは毒虫のような (wie) 姿（直喩）とは表現されていない。彼は一つのものであり，いかなる比較もここでは行われてはおらず，従来のメタファーがそのまま引き継がれている。このことはこれまでのカフカ研究が幾度となく確認してきた[14]。そして『変身』を非現実的な物語として読むことで逆に甲虫の姿に本来的なもの

の「表現」をみる可能性が開かれた。例えば，「出口への憧れ」の表現（バイケン）として，「孤独」（クルティウス），あるいは「見捨てられたもの」（エラース）の表現として，またグレーゴルの労働力の搾取にたいする「刑罰」（バイケン）あるいはグレーゴルに対する「汚名」，「烙印」の表現（カネッティ）として解釈されてきた。しかしそれらをここに列挙してみても意味のないことであり，またこのうちのひとつを決定的な答とすることにも無理がある。テクスト理解のためにどのような視点からどのような解釈が可能であるかを明らかにする必要がある。

1）伝記的解釈

カフカ自身の手紙，とりわけ『フェリーツェへの手紙』が刊行された（1967）前後からH・ビンダーにより，あるいはJ・シュービガーやW・ゾーケルによって伝記的アスペクトからのアプローチが成果をあげている。例えば次のような指摘がある。

—『変身』の執筆が開始された11月17日のフェリーツェ宛の手紙に「わびしさのあまり起きられない」と書かれている事実。

—カフカの父が息子の友人であったイディッシュ劇の俳優レーヴィに対し「毒虫」[15]という単語を用いて蔑んだこと。

—同じく父が雇人のひとりを「肺病やみの店員」とよんだ事実。（グレーゴル自身かつては店員であった。カフカも肺病のため早期に年金生活に入っている。）

—カフカが若い友人ヤノーホに『変身』は告白ではないが，ある意味で文学的秘密漏洩にあたると語ったこと[16]。

しかしこうした事実は結局は伝記上の著者と物語の主人公との内面的親近性を述べるにとどまり，それ以上のテクスト理解は望めない。テクスト成立の伝記的風土を正確に再構成できるときこそ，せいぜい著者の内面の動きや夢想について観察すべきであろう。言語芸術を日記や手紙に表現された思想や気分の再構成に降格させてしまうことは許されない。

『変身』を作者の個人的な危機のドキュメントとして読もうとするなら，

グレーゴルの運命はカフカにとって惨めさからの存在しない脱出口ということになる。この運命の叙述は，K・フィンガーフートが『判決』について述べたように[17]，「自己啓蒙」の一種として役立つ。つまり自分自身の不快な状況を単に訴えているだけでなく，脱出口はあり得ないという確証なのである。伝記上の自我は勤め人（労働者災害保険局）としての生活と芸術家存在（書くこと）との間の矛盾に耐えている。その後，婚約するにいたったが，フェリーツェは待ち望んだ解決策（家族からの離脱）とはなり得ず，胸苦しい家族関係の中へ新たに参入してくるおそれがあった。この緊張関係に解決の道はなかった。家族に求められている「役に立つ人間」になることと，寄生しているかの如くみえる芸術家としての存在の間にも第3の可能性はなかった。独身者と夫となった人間の間にも同じように可能性はない。人間であることを放棄すれば，こうした選択の義務から解放されるが，それは同時に家族にとって厄介な〈Zeug〉（もの）になることであり(E141)，女中に掃き棄てられることを意味していた。

2）心理分析の立場

この解釈を代表するのはW・ゾーケルであろう。グレーゴルの願望の夢の中には父に対する古くからの権力闘争がひそんでいる。変身する前に彼は父の意に反して，妹を音楽学校へ入れることで，家族の長としての権威を獲得しようとした。カフカが妹オットラと手を組み父に反抗したことはよく知られているが，『父への手紙』にはカフカとオットラが父の権威の前に止むを得ず抵抗する話が詳しく語られている。(H184f.; 191f.) そして地図の中に父の権力の及ばない場所を発見する以外に道がないとも訴えている。(H217f.) ゲオルク・ベンデマン（『判決』），グレーゴル・ザムザそしてヨーゼフK（『審判』）の3人は伝記的アスペクトからみた場合，父との葛藤における独身者カフカの変形であろう。結婚すらもが父の領域であり，息子の足の踏み入れることのできない場であった。(H217) つまり『変身』はまず第一に権力についてのテクストなのである。

グレーゴルにはすでに多くの研究者が指摘しているように，女性にたい

する抑えられた情熱がある。彼にはこれまで女性との接触がなかったわけではないが，求婚に時間をかけすぎて失敗してきた。(E122) だがその情熱の本当の対象は妹グレーテであることが次第にはっきりしてくる。彼女はこれまで「あまり頼りにならない娘」(vgl. E104) とされてきたが，ここで思いがけず裏の意味を得る。

変身自体，妹に献身的に兄の世話をさせるという，まったく予期しなかった意味を与える。それは丁度子供が夜尿症など，発育の初期段階に退行することによって両親の粗末な扱いに反応するのに似ている。暗黙のうちに温かい愛情を求めている。グレーゴルのなかにこうした子供の姿をみているH・ビンダーの解釈[18]は正しいであろう。グレーゴルは独立心を失い，次第に妹を頼るようになる。これも妹にたいするアピールである。しばらくグレーテはこの訴えに従って兄の面倒をみるが，グレーゴルが性的な動機をもって彼女に接近するや，怒りを爆発させる。

「妹のヴァイオリンの音に引きよせられ，グレーゴルはいつの間にか居間に首を突込む。彼は心に決める。妹のスカートをくわえ，こちらの部屋へきてくれと知らせよう。誰にも邪魔はさせない。少なくとも自分の生きている限り，妹を部屋から出さないのだ。そのときはじめて彼の恐ろしい姿が役に立つはずである。だが妹に無理強いするつもりはない。自由意志でとどまってほしいからだ。音楽学校の費用を負担することを約束してやろう。妹は胸いっぱいになって，嬉し涙にむせぶだろう。そうしたら，妹の肩のあたりまで伸び上って，むき出しの首筋にキスするのだ」(vgl. E130)

その直後，不安がグレーテの兄にたいする保護本能を圧倒する。彼女は兄を「動物」と定義してもはや兄グレーゴルであることを認めない。グレーテがそこに見た恐ろしい姿(Schreckgestalt)は父のみならず妹までも征服せんとする抑圧者としての姿である。

物語の冒頭近くグレーゴルの日常生活が描かれている。セールスマンという仕事の性質上，毎日が旅の連続であり，会う人間は絶えず変わる。人間的な心の結びつきは望むべくもない。休日は自室に閉じこもり，糸鋸細工や列車の時刻表相手に時を過ごしている。極めて閉鎖的な生活であり，

そこには彼の神経症的な性格も浮び上ってくる。

心理分析的に読んだ場合，『変身』は誰をも本当には知らないが故に孤独な，そして自分自身を理解していないが故に他人をも理解できない一人の独身者の物語である。家族にたいする目だって密なる関係も，心の結びつきや責任意識というよりも外に向うことのない彼の心理的障害を証言しているように思われる。

3）経済的見地にたつ解釈

時間的に変身の前後を比較すると，外面的には勿論，内面的にも正反対の特徴がみてとれる。自由な動き，機敏さ，能弁，直立歩行などに対して不活発，緩慢な動き，言葉にならない声，匍伏歩行が目だっている。生産的な意味では何もせず，寝椅子の下に横たわる生活である。セールスマンから甲虫への変身の結果がこのような正反対の特徴を生んだとすれば，この変身の意味は，経済的にみた場合，明らかにこれ以上の搾取の拒否とみることができる。グレーゴルは自ら「セールスマンが人好きのしないこと」を認めている。(E 88) この仕事が非生産的で寄生的な生活と関係しているからである。それは反セミ主義の常套語とも重なり合っている。この物語では人種的な素性や宗教はテーマとされていないが，客観的にみた場合，ユダヤ人の小市民階級の典型的な生活である。商取引で生計をたてており，労働には従事していない。その意味では，厳密にマルクス主義のいう搾取にはあたらないかも知れぬ。グレーゴルは生産力を搾取される労働者ではないからである。しかし家族間の個人的な関係のなかではそれが行われている。グレーゴルは会社の上司の前に這いつくばり，父の借金を弁済しながら両親と成人した妹を扶養しなければならない。しかし父はグレーゴルには知らせないまま貯えまで持っていた。ザムザ家の経済は完全に息子に依存しながら，それでも父の権威がグレーゴルに移行することはなかった。道徳的にも精神的にも息子に依存しながらこの一家は恥ずるところなくこの関係を利用し尽したのである。G・ザウターマイスターは文化史的な側面から次のように述べている：「一家の父親は，資本主義の生まれるずっ

と以前に，例えば，ツンフト制のもとで経済的に護られた独立した職人として家族のなかに権威を獲得した。この父親は初期資本主義において独立性を脅やかされるにいたっても，なお彼の権威を保持していた……かくして経済的には劣っていても，それでも家族のなかの支配権を行使していた」[19)]

その意味で，このテクストは搾取のドキュメントと言えるが，同時に伝記的にも心理分析的にも読むことができる。カフカは彼の家族を扶養する義務はなかったが，アスベスト工場の共同経営者として貴重な時間を奪われた(搾取された)。心を許した妹オットラからもこの件で厳しい批判を浴びたのである。

第3部では働き手を失ったザムザ家のその後の様子が叙述されている。仕事に駆り立てられ，搾取される家族の惨めな姿である。父は銀行の下級吏員のために朝食を運び，母は見ず知らずの他人の肌着のために身をすりへらし，妹もまた客の言いなりになって動き回っている。(E122)

これこそ搾取され続けたグレーゴルの復讐のファンタジーがフィクションの上で現実に転換された姿である。変身は単に悪夢というだけでなく同時に願望の夢でもある。

4）倫理的にみたグレーゴル

『変身』を伝記的解釈から離れて，あるいはそれ以上の見地から読もうとすれば，さしあたり二つの可能性がある。つまり主人公のプシュケの中へ入り込むこと，即ち主人公の意識的，無意識的精神生活の全体を再構成すること――だが実際には文学に描かれた主人公の姿は心理分析の患者ではないから単に復元にとどまるわけだが――及びこのプシュケが現在のかたちをとるに至った外的環境と依存の関係を調査することの二つの可能性である。これら二つの可能性が一つになってはじめて意味をなすわけであるが，しばしば批評の対象とされる物語の最後の個所は読者や解説者を分極させている。哀れなグレーゴルの味方であったり，ザムザ一家の味方であったりするわけである。いまはグレーゴルの死にほっとして最後の場面に

牧歌的な雰囲気を読みとる読者もいれば，ザムザ一家の平常に復した生活を当然と考える読者もいよう。

しかし解説者の多くはグレーゴル批判の立場をとる。例えば，H・ポリツアー，P・バイケン等のように「誤りの存在」をみている解釈，あるいはカフカのいう「私の哀れな主人公」に対する批判として，環境との断絶，責任や義務の回避を指摘する声もある。

その結果としてここに倫理的な問いが浮び上ってくる。とりわけJ・シユービガーの指摘は興味深い。彼は甲虫の姿に「卑屈な態度」の象徴をみており，この態度は家族全体をも特徴づけているという[20]。彼はまた変身したグレーゴルのなかには他人の視線の前に自己の姿を隠してしまおうとする恥の心（Scham）と，逆にその苦しみの責任を家族に帰し，醜い姿をわざわざ他人の目にさらそうとする拗ねた心(Schmollen)がアムビヴァレントに同居していると指摘する。だが彼のアムビヴァレンツは信仰や希望の代りに疑念や不安，罪の意識を導くだけでなく，自己を顧みる反省の心を生むことにもなる。グレーゴルの黙想のときは変身して眼を覚ます朝に始まる。それ以前，彼が静かに自分の存在について考えたことがあっただろうか？「動物への変身」はしばしば指摘されてきた意識喪失のしるしではなく，逆説的だが，自意識と罪の意識（Schmollen と Scham）の間で揺れる，たったいま得られた意識のしるしなのである。

先に引用したように，カフカはフェリーツェ宛に「大きな距離をおいてやさしく私を許してほしい」と書いた。この「距離」はカフカの伝記のなかで鍵となる意味をにぎっている。変身後に芽生えた彼の意識は更に自己と家族との間の距離の省察にも向うことになる。これまでの彼は会社に雇われた人間でありながら，一歩会社の外に出れば，セールスマンとしてある程度自由な企業家的活動も許されていた。また家庭内では両親にたいして従順な息子であると同時に権力を求める扶養者であり，妹にたいしては良き兄であると同時に欲望を秘めた男でもある。つまり典型的な中間存在である。しかし変身したいま，さしあたり家族間のこの距離を縮めんとする。しかし兄に対する妹の「怪獣」という言葉に（E133），彼は和解のため

の努力も放棄する。妹に対する怒りからではない。すでに消え去るべき存在だということを妹の言葉よりも先に自身ではっきりと見極めていたからである。和解のための努力を放棄したとき，まさにこのとき実際には和解が果され，家族との亀裂の間に橋渡しが完成する。「彼は快適な気分のなかで，切ない愛情に胸をひたされながら，家族のことを思い返した」のである。(vgl. E136)

四　三部作：「息子たち」，「罪」

カフカは1912／14年の間に成立した短篇をめずらしく自分の意志で出版することを決意する。長編『失踪者』の第1章「火夫」についても同じことが言えた。その事情についてはK・ヴォルフ宛の手紙に記されているが，それによると「火夫」を〉最後の審判の日〈叢書の一冊に加えることに同意しながら，機会があれば，『変身』や『判決』と共に一冊にまとめ「息子たち」という表題のもとに出版したいという意向をいだいていた。この三つの短篇は「外的にも内的にも一体をなしており，ひとつのまとまりとした方がより大きな意味をもつ」と考えていたからである。(B116) 出版社の都合でこの本は出版されなかったが，2年後，カフカは再び一冊の本にまとめる提案をする。しかし今回はこの間に成立した『流刑地』(1914，10月)によってテーマも拡大されていたので，本来長編に含まれるべき『火夫』を断念し，『判決』，『変身』，『流刑地』の三編で一冊とし，表題も「罰」とすることを望んでいた。(B134)

この計画も実現しなかった。しかし同じ文脈から互の接点をさがすことは実り多いことであろう。特に『変身』は他の2編との交点にあると考えられる。そこでは息子たちと彼らの罰の問題がテーマとされている。

U・ルーフはカフカの作品における息子たちの心の葛藤について，それが父親になれない男ともはや父親ではない男の権力をめぐる闘いのなかから生れる，と書いている[21]。息子にとっては父にたいする罪を犯さずに済ますことはできないというジレンマがある。カフカが考えたように，父の世界の外部で自己の生活を建設すること，即ち家庭の外へとび出すことはな

るほど葛藤を避けることにはなるが，同時に，両親を見捨てた，彼らの「愛に値しない息子」という意識をいだき続けることになる。

他方，家族関係のなかにそのままとどまれば，いずれ父の権威を脅かす存在となる。『変身』に当てはめて考えてみるならば，「息子であると同時に父親であること」がグレーゴルの夢である[22]。この夢が実現不可能であるとき，次は妹にたいして兄であると同時に男であろうとする。グレーゴルの夢はつねに愛を失うことなく権力を手に入れることである。そこには愛情と罪の意識の入り混じった感情があるはずである。

こうしてみると1912／14年の短篇の主人公である独身者たちは解決策を探し求めるカフカの実験に参加させられていたことになる。『火夫』のカール・ロスマンは女中との情事を理由にアメリカへ送り出されるが，ニューヨーク港に出迎えた伯父のなかに彼は父の代理を発見する。そして同じ責め（知らずに他人の婚約者に近づきすぎた）を伯父にたいして負うことになる。

『判決』のゲオルクは事業において父の代りをしただけでなく，結婚をのぞみ，積極的に父の世界から逃れ出ようと試みた。しかし父は彼を放免せず，再び子供の役割のなかへ引き戻す。ゲオルクのペテルスブルクの友人も父の世界に所属している。結婚の動機も父によってただ卑しい性的欲望と決めつけられている。(E 64) これは『父への手紙』のなかの文と厳密に一致する。(H156)

同様に伝記的，心理分析的解釈にみるグレーゴルの姿もまた精神的発達を妨げられた独身者の姿であり，真剣な結婚の願望もつねに罪の意識と結びついてしまう。これは父との日常的な付き合いのなかから生れた作者の苦い経験の結果なのである。そのなかでグレーゴルは自らの成長をストップさせ，糸鋸細工や列車ダイヤの研究を趣味として，少年のような生活を送っている。成長しないまま息子は父の代理を務め，一家の扶養者となったのである。甲虫の姿となって自己を表現するというのもまた逆説である。そこに幼児的なものへの退行をみているH・ビンダーはその意味で正しい。しかし忘れてならないのは，変身後もグレーゴルが人間の意識をもち続け，

幼児にも，また完全な甲虫にもなっていないという点である。

カフカは息子たちのジレンマを解決するため三つの可能性を検討している。そして海外移住も（カール）父の排除もできなかったとき（ゲオルク），残された道は父の世界の内部にとどまり，内的亡命を果すことであり，グレーゴルであることを解消してしまうことであった。彼は結婚の願望も，父の権力を手にする夢も，ついには食べ物を口にすることも断念する。しかし家族からの人間的なよびかけは得られない。甲虫に変身し，幼児に退行しても「一切は変らなかった」(E110)

カフカの考えた第2の三部作，即ち『判決』，『変身』，『流刑地』の比較分析では，カフカの言葉に従って，「罰」がテーマとなる。上に述べたように，罪を生みそうな一切のものを断念し，食べ物も拒否した。しかし無罪を主張できる可能性は発見できない。このとき罰をめぐるさまざまな問いが生れる——罪の意識と実際に課せられる罰との間にズレの生ずることはないか，あるいは有罪判決を受けた人間が自らの手で罰を下す決意をしたとき，罰の強制力は止揚されるのか。罰は本来それを狙いとしているのではないのか。

こうした疑問をカフカは法学博士の立場から提出し，この三つの作品において検討する。

例えば，『判決』では父に死刑の宣告を下された息子が自らその判決を実行するが，かりに父がこの判決を実行し，息子に暴力を加えた場合，父が不正を働くことになる。実際にはしかし息子の自殺により，父は法のなかにとどまることが許される。そんな想定がカフカのなかに生れたはずである。

同様にまた，罰のアスペクトからみたとき，グレーゴルは自らの意志で変身することにより判決を執行したことになる。その結果，罰の強制的性格が止揚され，罰が新たな不正を生み出す可能性も無いとしたら，この先，いったい何を生み出すのか？

この疑問が第3作目の『流刑地』で極端なかたちをとって問題にされている。流刑地の無気味な処刑機械は，被告の体に針で判決文を刻み込み，

無理やりそれを読ませようとする。だが読めない。それは罰そのものから，よりよい効果を期待する法理論の逆説的な姿である。理解されない罪はついに「正義」を考え出した人間の体において償われなければならない。それ故，機械を操作する士官みずからこの機械のなかへ身を横たえることになる。

かくして後から成立した『流刑地』が『変身』で問題とされた事柄を解明してくれる。つまりグレーゴル自身，どこに自分の「過ち」があるのかを理解していなかったのである。グレーゴルは会社や家族から出される，本来，相容れない一切の要請を彼一個人のなかで一致させようと努力してきた。そして変身したいま，人間として理解できなかったこと——父や妹との関係における過ちを甲虫となった体で「読む」のである。上官に反抗した『流刑地』の兵卒は「上官を敬え！」という判決の言葉を体に刻みつけられる。罰は規律の軽視に向けられている。これに関連して，「船には正義がない，あるのはただ規律だけだ」と訴えた火夫の言葉（V 14），あるいはグレーゴルの職務放棄を責める支配人の言葉（82）もここで同時に思い出されるべきである。

カフカは父にたいする不従順がどういう結果に終るか，幼児期を絶えずその嚇しのなかに生きていたと書いている。(H177)　罰はそもそも過ちそのものでなく，規律の軽視に向けられていたのである。

この三部作では，ごく個人的な罪の問題から出発した罰をめぐる思索が西欧の法理論とのかかわりにおいて拡大され，内面化されていったとみることができる。

注

カフカの作品，手紙からの引用個所は本文中に（　）で示してある。数字はその頁数，略記号は次の通りである。

B　Franz Kafka, Briefe　New York/ (Frankfurt/ M.) 1958

E　Franz Kafka, Erzählungen　New York/ (Frankfurt/ M.) 1946

F　Franz Kafka, Briefe an Feliee　New York/ (Frankfurt/ M. 1967)

H　Franz Kafka, Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande　New York/

(Frankfurt/ M. 1953)

T Franz Kafka, Tagebücher New York/ (Reutlingen 1967)

V Franz Kafka, Kritische Ausgabe, Der Verschollene New York/ (Frankfurt/ M. 1983)

1) Hartmut Binder, Kafka-Kommentar zu sämtlichen Erzählungen, 1975 S. 152ff.

2) Elias Canetti, Der andere Prozeß, München 1969.

3) Wolff Kittler, Brief oder Blick In: Der junge Kafka (Hrsg. v. Gerhard Kurg) 1984, S. 41

4) Canetti 前掲書 S. 18

5) Karlheinz Fingerhut, Die Phase des Durchbruchs In: Kafka-Handbuch (Hrsg. v. Hartmut Binder) Band 2, 1979, S. 265

6) この日以降，1912年12月6日までの手紙にみる「物語」とはつねに『変身』をさす。

7) Hartmut Binder, Kafka, Der Schaffemsprozeß, Frankfurt/ M. 1983

8) 1912年1月7日の日記。当時カフカは Durchgangszimmer を使用しており，昼間から家族のトランプ遊びの騒ぎ，殊に父の大声に悩まされた。

9) Ulf Abraham, Die Verwandlung, Frankfurt/ M. 1993, S. 22

10) Walter Sokel, Franz Kafka, Tragik und Ironie, Frankfurt/ M. 1976, S. 85

11) Hartmut Binder, Kafka, Der Schaffemsprozeß, Frankfurt/ M. 1983, S. 163

12) Ulf Abraham, Der verhörte Held, München 1985, S. 5f.

13) Heinz Politzer: Franz Kafka, Der Künstler, Frankfurt/ M. 1978, S. 117

14) Thomas Anz, Franz Kafka, München 1989, S. 77-84
Peter U. Beicken, Franz Kafka, Eine Kritische Einführung in die Forschung, Frankfurt/ M. 1974, S. 261f.

15) 上記 H. の S. 171にカフカの父が Löwy を Ungeziefer とよんだことが記されている。この父は息子に対しても Wanzen (南京虫) というような蔑称を平気で使用した。

16) Gustav Janonch, Gespräche mit Kafka (Fischer-Bücherei 417), 1961 S. 28

17) Karlheinz Fingerhut, Franz Kafka, Klassiker der Moderne, Stuttgart, 1981, S. 87

18) Hartmut Binder, Kafka, Der Schaffensprozeß, Frankfurt/ M. 1983

19) Gert Sautermeister, Die sozialkritische und sozialpsychologische

Dimemsion in Kafkas »Die Verwandlung« In: Der Deutschunterricht 26, H. 4, S. 104

20) Jürg Schubinger, Franz Kafka, Die Verwandlung, Eine Interpretation, Zürich, 1969, S. 37

21) Urs Ruf, Franz Kafka, Das Dilemma der Söhne, Berlim, 1974, S. 87

22) Urs Ruf 上掲書 S. 63